

「時間」

森田, 良紀

<https://doi.org/10.15017/2328728>

出版情報 : 哲學年報. 28, pp.347-368, 1969-08-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

「時 間」

森 田 良 紀

Quid est enim tempus? quis hoc facile breuiterque explicauerit? quis hoc ad uerbum de illo proferendum uel cogitatione comprehenderit? quid autem familiarius et notius in loquendo commemoramus quam tempus? et intellegimus utique, cum id loquimur, intellegimus etiam, cum alio loquente id audimus, quid est ergo tempus? si nemo ex me quaerat, scio; si quaerenti explicare uelim, nescio: (Augustinus)

わたくしは「時間」について論じようとしている。しかし、わたくしはのぞむと否とに拘らず、「永遠」について語らないわけにはゆかないだろう。わたくしは形而上学的独断を避けて「時間」について分析しようとしている。しかし、「時間」について分析しようと試みる事は、われわれがボジの写真を眺めるとき意識すると否とにかかわらず、同時にネガの絵を眺めているのとおなじく、「永遠」について触れずにはおられないであろう。わたくしは矢張りここでひとつの形而上学的構想についてかたることになるであろう。

わたくしのこの論文は「時間」についてのひとつの試論に過ぎない。「時間」についてここで述べる諸観念はわたくしの心の中に長い間在ったにもかかわらず、時日のないいま、わたくしはひとつの試論としてのべるほかない。もし、ここで述べる諸観念のうちのいくつかが意味のあるものであり、わたくしの生涯のうちにその「時間」があるならば、わたくしはいく度でもこの試論を修正し展開し書き直してひとつの体系にしたい。しかしながら、この論文がいかに断片的な試論であっても、この論文を書こうとしている今、わたくしは一つの時期、ひとつの纏った「時間」を持つとしてゐる。このひとつの纏った「時間」をもつということは一体何を意味するであろうか？ わたくしはこの論文を書き終えることによって少しでもその意味を明らかにしたい。

わたくしは、この論文で、わたくしにとつて有意味であると思われる幾つかの前提、あるいは、観念の下に「時間」概念についての批判的分析をしようとしている。ところで、わたくしが、先づ第一に、提出したい観念は、「時間」はたんなる概念でも表象の形式でもなく実在の様相、われわれもふくめた世界の在り方である、ということである。実はこの観念は手の込んでいないもとも素朴な日常的信念にすぎない。わたくしはこの日常的信念をそのままとりたいと思う。われわれはテンスをもった言語でもってこの世界の在り方を記述する。言語の動詞の曲げがわれわれに「時間」を示しているのである。わたくしはこの動詞の曲げ、変化がたんなる言語の約束事であるとは思わない。この文法は実在の様相を映している、とわたくしは主張したいのである。わたくしは母の乳の香りのする幼年時代をもらった、強いよろこびと憂鬱との感情の波がはげしく起伏する青年時代をもった、今わたくしはペンを握ってこの論文を静かに考えている、やがていつかはわたくしにも老年と死がやってくるであろう。この素朴な信仰に対してわた

くしは抵抗しがたいものを感じる。これらの動詞のテンスの曲げが単に言語上の約束事に過ぎない、などとは信じられない。わたくしの日常的信念にしたがえばそれらはわたくしが身をもって経験し、経験し得るところの实在の様相を示しているのである。「▲みよ、汝は吾等の日々に老いを定め給いき▼吾等の日々は移ろい行くが、どのようにしてであるかをわたくしは知らない。」

第一の観念をわたくしは無条件に、証明を抜きにして主張する。この観念をわたくしはこれ以上展開しようとはしないであろう。しかしながら、この観念は次に述べる第二の観念と密接に結びつき、そればかりでなくわたくしの議論全体を貫く基本的態度をなしている。手短かにいって、わたくしは「時間」にかんしてはリアリストの態度をとるのである。次に述べる第二の観念というのは「現在」、あるいは、「今」についての観念である。この観念をわたくしは、第一の観念とは逆に、できるかぎり展開し、その内容を批判的に分析するであろう。此処で、わたくしがとる前提は「現在」、あるいは、「今」は振りを持つという考えである。わたくしは、たとえば、デカルトの「時間」アトム説とは反対の前提をとるであろう。デカルトの「瞬間」という「時間」のアトムが或る振りを持つか、それとも何らの振りも持たぬものであるかは問題であろう。しかし、いずれにしても、わたくしは「時間」を「瞬間」から合成されたものであるとかがええない。又、わたくしはわたくしの明証的注意が集中している限りの「瞬間」を「現在」であるとも考えない。それももちろんひとつの「現在」である。しかし「瞬間」が唯一の「現在」であるとも「現在」の原型であるともかながええない。わたくしにとってより自然で意味であると思われる「現在」は、「瞬間」ではなくて振りを持ち、一面、この振りとは論理的構造をもち、他面、この振りは通常明証性よりも漠然性を、

しかも、無限の陰影に富む漠然性をさえもつ。これがわたくしの「現在」についての観念である。わたくしはこの観念の下に分析をすすめるであろう。この前提をとることによって、エレアのゼノンのパラドックス—兎と亀のパラドックス、あるいは、飛ぶ矢は飛ばないというかの有名なパラドックス—はわたくしにとって意味を失うことになるであろう。もし、わたくしが「現在」は「瞬間」でありそれ以外の「現在」はないという観念を分析の前提にとるならば、わたくしにとってゼノンのパラドックスを退けることははなはだしく困難になるであろう。むしろ、わたくしは飛ぶ矢甲は「瞬間」Aにおけるその位置aから次の「瞬間」Bにおけるその位置bへと映画におけるように点滅しながら飛躍すると考えねばならなくなるであろう。「時間」における飛ぶ矢甲のリアリティは映画のフィルムの一コマ—コマのごとくであって「瞬間」から「瞬間」へと点滅しながら飛躍しているのだと言わなくてはならなくなるであろう。否、むしろ、飛ぶ矢甲ばかりでなくわれわれ自身も含めたわれわれの世界全体が「瞬間」から「瞬間」へと点滅しながら飛躍しており、今わたくしがこの室に座って書き続けている、考え続けている、というのは、映画の観客の**ばあい**のように錯覚あるいは幻覚に基づいた信念である、ということになるであろう。わたくしはこの様な前提を退けたくおもう。

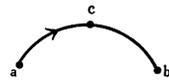
わたくしの分析の基礎になる「現在」、あるいは、「今」の観念はより日常的信念に忠実な観念である。わたくしの分析の出発点となる命題は日常的経験の命題、「今（現在）わたくしはバスに乗っている」とか、「今（現在）わたくしは本を読んでいる」とか、という命題である。この平凡でもっとも自然な命題の意味を明かにすることは、若しわたくしがさき退けた前提をとっている限り、それは極度に困難となるであろう。その際これ等の日常的命題はきわめ

て不正確であつて無意味を語っていると退けるか、あるいは、これ等の命題をきわめて手の込んだ論理的操作によつて論理的に有意味なより、基礎的命題群に還元・翻訳しなければならなくなるであらう。しかしながら、もしもさぎにのべたわたくしの前提をとるならばこれ等の作業は一切不必要である。最も基礎的で自然な「今」についての命題はわたくしにとってさきに挙げたような命題である。わたくしは「今」バスに乗っている、バスの車内の空間の拡り、車内の人々のおしゃべり、わたくしの独りのもの思い、わたくしがバスから降りるまで車窓を流れ去る風物、これらの時空の拡りがわたくしにとっての、あるいは、バスに乗り合せた人々にとっての（わたくしと共にする世界の）「現在」である。あるいは、わたくしは「今」ブラームスの音楽を聴きながら或る小説を読んでいる、小説のなかの意味に充ちた情景と耳にきく旋律とが微妙な調和をなしてわたくしに複雑な情感をかきたてる。わたくしの身の廻りを夜の静寂な空間がとりまいてゐる。これがわたくしにとって最も基礎的で自然な「現在」である。この「現在」は基礎的であるが、しかし、ほとんど無限な陰影に富んでいて複雑である。わたくしはこの「現在」の觀念を分析する為により単純な事実の分析から出発しようと思ふ。



第一 図
わたたくしは静止せる飛ぶ矢というさきのゼノンのパロドックスに戻ろう。飛ぶ矢甲は地点 a から射出されて抛物線を描き第一図の様に地点 b に落下するとする。ゼノンにしたがえば飛ぶ矢甲の軌跡抛物線 ab は無限個数の点から合成されている。そうして飛ぶ矢甲が地点 a から地点 b に到達するためには、飛ぶ矢甲はその軌跡上の無限個数の点を次々に一つづつ経過しなければならない。これを「時間」の見地からみると、飛ぶ矢甲が地点 a から地点 b に到達するまでに経過する時間 T は無限個数の「瞬間（今）」

から合成されていることになる。これはわたくしが退けたところの前提にほかならない。この様な前提をわたくしは退けたのであるから、わたくしにとって飛ぶ矢甲の軌跡拋物線 ab は点に解体出来ない不可分の「単純な事象」である。⁽³⁾又、飛ぶ矢甲が地点 a から地点 b に到達するまでに経過する時間 T もまたわたくしにとって「単純な事象」である。もし、この時間 T が 5 秒であったとすると、この 5 秒を「今」と呼ぶことにわたくしは少しのためらいもかんじないであろう。しかしながら「単純な事象」だけがすべての「現在」なのではない、むしろ、われわれにとって自然な「現在」の観念は「単純な事象」よりもはるかに複雑な拡りを持ち、その拡りは、内部的に論理的構造をもっている。わたくしはもう一步分析を進めてみなくてはならない。もし、飛ぶ矢甲がその軌跡上の一点 c で第



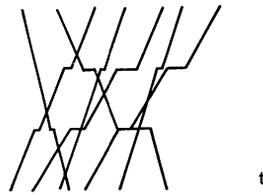
第二 図

二 図における様にあたかも奇跡によるかのように、一瞬〇秒間停止して地点 b に落下したとする、この第二図の事象は第一図の事象とわれわれにとって全く意味を異にする違った事象である。もっと事態が明瞭になる例をあげることにしよう。五秒間、オクターブ a の高さの音をサキソフォンで吹き続けるとする(事象 A)、今度は、オクターブ a の高さの音を二・五秒間サキソフォンで吹き、直ちにひき続いて

二・五秒間同じオクターブ a の音をフリユートで吹き次ぐとする(事象 B)。事象 A と事象 B とは明らかに異った意味をもつ別個の事象であろう。或は、二・五秒間オクターブ a の音の高さでサキソフォンを吹き、同じサキソフォンで一オクターヴさげたオクターブ $a-1$ で二・五秒間吹き次ぐとする(事象 C)。事象 C は事象 A とも事象 B とも異なる意味を担った独立の別個の統一をもったひとつの事象である。そうして夫々事象 A 、事象 B 、事象 C はそれ等をわたくしが聴いていた間、それぞれがわたくしにとって異った意味を帯びた「現在」であった。この様に、わたくし

の前提のもとにおける「現在」はたんに「単純な事象」ばかりではなく複雑な「複合した事象」でも亦あり得る。

そこから、わたくしは、第三の観念を主張したい。その観念によると「現在」はひとつの纏った意味論的統一をなしてをり、その内にはひとつ以上の事象、あるいは、出来事が含まれていて、ひとつの文脈 context を形成している。わたくしは空間に投影された、空間に拡りをもった「現在」というものを考えてみよう。わたくしは、具体的に、時空は連続しており本来的には切り離してかんがえられないとかんがえる。例えば、第一図に戻ろう、第一図の拋物線 ab は飛ぶ矢甲の飛跡である一次元の空間の拡り (extensio) を示していると同時に、時間 T をもつ「現在」の拡り (distensio) をも亦示している。第三図は列車の時刻表の図である。中央制御室の



第三圖

壁面にこの図表があり、列車甲の進行は黄ランプの灯によって示され、列車乙の進行は青ランプの、列車丙の進行は紫のランプの……、そうしてこの室の専門家が壁面の図表を眺めているとする、この男は何百キロにも及ぶ或る「現在」の空間の拡り extensio の投影図を壁面に眺めているのである。この高度に訓練された男はさらに又過去と未来への拡り distensio の implications をこの「現在」のうち直観的に眺めていることが出来るであろう。すなわち、列車甲は何十分後に列車乙との地点ですれ違い、列車丙とさら

にどの駅で何分後に接続するか……等々。さらに、図表のある一点にもしも障害物を示す赤ランプが点滅したとする、この専門家はこの「現在」がいかなる危険の可能性を内含しているか、この可能性の実現をこの「現在」の論理的構造が含んでいる何か或る別の可能性を実現させることによって阻止しない限りは、この「現在」がいかなるカタ

ストロープに導かれるか、も直観的に見て取ることが出来るであろう。この例は「現在の」論理的構造をその最も単純な形でわれわれに示しているのだ、とわたくしは考える。この様に、「現在」は論理的内部構造をもっている。この例の様に「現在」の論理的構造の内含する意義 (value, valeur) が単純であって抽象化して数学的に記述 (絵 || 図表) 出来る場合、この「現在」と殆んど識別し区別出来ないほど相似た「現在₁」、「現在₂」、「現在₃」……「現在_n」が反復して現れる。論理的構造は恒常性をもっていて反復することが出来るものなのである。しかし、厳密にはこれ等の「現在」のもつ意味は夫々にユニークで相異なる、とわたくしはかんがえる。さきにもべた専門家がたとえば毎日一定時間勤務するとして、この専門家は毎日ほとんど同一と言ってよい相似た「現在」の系列を経験する。しかし最も厳密に言つてこの男が今日経験しているこの「現在」は再びけつして繰返されることのない一回限りの唯一の意味をもった「現在」なのである。わたくしはこの点について後でくわしい分析を試みるであろう。ただ、わたくしは次の点をいま暗示的に述べておきたい。この専門家は、或る日、赤ランプが図表の上に点滅するのを見る。即ち不意の突発的事故が生じたのである。この男は迷い込んだ異常な意味を帯びた未知の「現在」を経験するのである。たとえば宇宙人の襲来によつて、この事故が起きた事故であったにしても、或はどのように思いも及ばぬような異常な事故であったにしても、われわれにとつて、この「現在」の異常な意味は、図表が示す論理的構造の意義によつて理解されなければならず、また理解されるものである、とわたくしは考える。

わたくしは空間に振りをもち、空間に投影された「現在」を分析してその論理構造をあきらかにしようとしてき

た。今度は、わたくしは、時間に拡りをもった「現在」を分析しその論理構造を明らかにしなければならない。わたくしは、その論理的構造を、仮にピアノの論理と名づけておこうと思う。ここに、ひとつのピアノでたたく旋律がある。わたくしは音のひとつひとつを聴いているのではない。わたくしの前提に従えば、本来的には、音のひとつひとつが「現在」なのではない。わたくしは意味論的統一をもったひとつの旋律全体を聴いているのである。わたくしは意味をもった旋律を、むしろ、旋律の意味を聴いているのである。これが、わたくしの前提に従った、「現在」の観念である。この「現在」の論理的構造を記述すれば、たとえば、第四図の如くなる。わたくしの指は今ピアノのキイCを叩いて走った。しかし、わたくしは、C音だけを聴いているのではない、A音をもB音をも、更には、未来のD音の可能性をも聴いているのである。われわれの前に現われているもの、あるいは、現われようとしているもの、実現actualizeしようとしているものは第四図で記述される論理的構造||意義(value, valeur)をもった旋律全体の意味なのである。これがわたくしの言う時間に拡り(distention)をもった「現在」なのである。



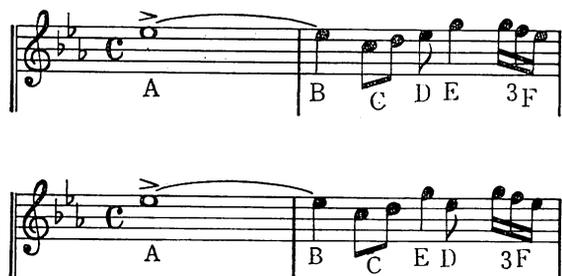
第四圖

もしも、「現在」が時間に拡りをもたず一瞬間限りのものであったとしたならば、われわれはこの「現在」においてC音のみをしか聴いていず、A音もB音も、更にはD音も聴いていないことは出来ないであろう。何故なら、A音やB音はすでに過去の非存在のうちに流れ去っているのであるからである。この前提の下では、われわれはA音、B音、C音、D音をそれぞれひとつづつ別々に一瞬間づ

つしか聴くことが出来ず、決して第四図で記述された論理構造をもつ旋律そのものを聴くことは出来ないであろう。この「時間」についての論文においてわたくしがもっともおおくの示唆をうけたのはアウグスチヌスの時間論である。アウグスチヌスによればA音、B音は精神の記憶のうちに現在し、C音は精神の直観のうちに、未来のD音は精神の期待のうちに現在している、⁽⁶⁾ということになるであろう。しかし、わたくしはこの心理主義的色彩の説明を退けたく思う。まして、わたくしは「現在」の拡りは精神の拡り (distention)⁽⁷⁾ であるというアウグスチヌスの考えを拒否するであろう。わたくしがここで提出している前提に従うならば、「現在」の拡りは客観的な拡り、実在がわれわれの客観的な経験において自己を示す拡りであるといえる。第四図に記述されたところの構造をもつ旋律の意味そのものを、われわれは、この「現在」において耳を傾けて聴くのである。そうして、第四図に記述された構造はこの「現在」の論理的絵図であり、われわれがいま耳にしている旋律全体の意味がこの「現在」というもののリアリティである。これがわたくしのテーゼであり、そうしてこのテーゼほど自然なテーゼはないであろう、とわたくしは信じる。たとえば、われわれがなにか言葉 (speech, parole) を語るとき、あるいは、語られるのを聞くと、われわれが聞いているのは言葉の意味でなければならぬ筈であって、(この言葉を構成しているいくつかの音の) そのひとつひとつの音ではありえないだろうからである。したがって、われわれが全然その意味を理解することがないまま多くの未知の外国語が語られるのを聞くと、われわれが耳にして聞いているのは一連りにつらなる音の連続であって、それらの音がどこで分節 (articulate) して語を作り単語をなすのか判別ができないであろう。これ等の物理的音の鎖りを分節 (articulate) するものは意味なのであって、⁽⁸⁾ わたくしはこの意味は、主観的ではなくて、客観的なものである、と主張するのである。

わたくしはピアノのキイCの文法、あるいは、五線譜の上の音符Cの文法に戻ってもっとくわしく立ち入ってその文法を明かにしようつとめよう。彼の指は走ってキイCの上を過ぎながらそれを叩く。その時、音符Cの意義、(value, valeur) は表現されて、われわれの耳にC音が響く。C音と共にA音もB音も旋律全体のなかでその意味、(meaning, Bedeutung) を明かにして、われわれの耳はその意味を聴く、別の言葉でいえば、音符A、Bなる意義の内含する潜在的可能性(Possibilities)は、いま聴くC音によってより規定されてその意味はよりあきらかに現実化する。すなわち、第四図の構造はより明かに全体の姿を現わそうとし、A音、B音がこの構造全体のなかで果たす役割とその位置はより明かになろうとする。ところで、いま響いているC音にとって先行のA音、B音はこのC音の意味、(meaning, Bedeutung) を必然的に条件づけ規定しているところのものである。C音にとってA音、B音、及びその構造のなかで占める位置と秩序は変更不可能な二度ととり返しの利かない(irrevocable) 必然的、所与の過去である。しかしながらいま耳にしているC音の意味はこれ等先行の必然的、過去によってのみ条件づけられているのではない、そのみではなくて同時に又、未来の自由なD音の可能性によってもまた条件づけられ規定されているのである。いまD音を指で叩く。われわれはこのD音の響きのなかにA音もB音もC音もその意味、(meaning, Bedeutung) を現実化し旋律全体の意味、(sense, Sinn) が現実化し終えるのを聴く。むしろ、われわれがA音、B音、C音、D音において聴いていたのは旋律そのものの意味だったのであり、A音、B音、C音、D音を規定しているものは常に第四図の構造、むしろ、この構造の可能性であるところの(旋律全体の)フォームなのである。

もしも、この旋律がわれわれにとってはじめて聴く新鮮な旋律、むしろ、即興の旋律であるとする。そうして、い



第五 図 上<A>図 下図

ま、われわれの耳にC音が響いているとする。そのとき、C音の次にくるD音はわれわれにとっては全く未知の領域、殆んど無限な可能性の領域に所在しているかの様に見えるであろう。しかしながらそれにも拘らず、この未来のD音が所在する自由な領域は決して無限でも無規定的でもない、とわたくしは言いたい。なぜなら、D音は—どの様にそれが自由であるように見えても—やはり五線譜の上に所在するのであり、音楽のルールによって条件づけられ規定されているからである。それ故、C音においてわれわれはやはり漠然とD音を、むしろ、旋律全体の意味、というものを聴いているのである。そうして、この自由な即興の旋律においても、A音、B音、C音、D音を支配し規定しているものは旋律全体の意味論的統一であり旋律の構造の可能性であるフォームなのである。

読者は第五図の<A>図、図に注意していただきたい。<A>図と図とは相異った「現在」のリアリティを示している論理的絵図である。わたくしの指はピアノのキイを<A>図の様に叩く。それからわたくしの指はまたピアノのキイを図とは全然別個のリアリティである。<A>においてもにおいてもC音は二度ととり返しの利かない(irrevocable)過去であるところの先行の二条件、A音、B音によって必然的に条件づけられ決定されている。しかしながら、<A>におけるA音、B音と、におけるA音、B音とは同一の意味(meaning, Bedeutung)を示し実現しているのではない。C音についても同じである。何故なら、<A>におけるD音、E音と、

《B》におけるE音、D音とは秩序を異にしている、それよりもむしろ、《A》と《B》とは全然別個のリアリティを示し、《A》における旋律のフォームと《B》における旋律のフォームとは全然違っていて、A音、B音、……等々の意味を規定しているものは旋律全体のフォームなのだからである。それゆえ、C音を規定しているA音、B音はC音にとって二度ととり返しの利かない(irrevocable)必然的所与の過去なのであるが、しかもとり返しの利くもの(revocable)なのである、と言うと読者は一種のパラドックスを聞かされたとおもうであろう。しかし、第五図を見ていただきたい。C音の次にD音がくるか、E音がくるかによって、すなわち、第五図の《A》の様になるか、《B》の様になるかによって、A音、B音の意味(meaning, Bedeutung)は両者においては全く違ったものになるであろう。しかしA音、B音は両者において違った意味をもつのであるが、それにもかかわらず、A音、B音は両者において或る実在的な同一物を共有する。すなわち、五線譜上の音符の同一位置や秩序によって客観的に記述出来る実在的な同一物を共有しておりこの同一物をわたくしは意義(value, valeur)と呼ぼうと思う。意義はむしろ可能性の実在的な弾力的束の様にかんがえることが出来るであろう。すなわち、わたくしは指がピアノのキイAを叩きA音が響けばこの可能性の束も意味(meaning, Bedeutung)を帯びて響き実現する、しかし、この可能性の総てが実現するわけでも、完全に実現するわけでもない、意味の無限な陰影はまだ未実現の可能のうちにとどまっている。わたくしの指はキイBを叩き、キイCを叩く、……。音符A、Bの意義の可能性は旋律全体の動きのフォームによって実現されてゆく。したがって、C音にとってA音、B音は二度ととり返しの利かない(irrevocable)必然的過去であるが、しかし、この過去はほとんど無限な陰影に富む可能性を含んでおり、諸可能性にとり巻かれていて、つねにC音の未来によつ

て新たな意味、(meaning, Bedeutung) を実現し獲得し、とり返し、の利きうる (revocable) もの、と言えるであろう。此処で、わたくしは、誤解を避けるために、わたくしがいま述べた可能性の束は肯定判断の束ではなくて否定判断の束であることに注意しておきたい。この否定判断とその論理的機構についてはわたくしは別個に独立した論文を書いて主題的に論じたいと思う。ただ、ここでは、わたくしは「時間」を実体的なものとは考えないこと、「時間」は実在を可能的に開くものであること、「時間」の領域は独立変数の領域にも、従属変数の領域にも属さず、第三の中間の媒介変数の領域に属する、と考えることを述べておきたい。ここで、わたくしはわたくしの論文の第四の観念にふれる。この観念をわたくしはこの論文のどこにおいてもとくに立ち入って主題的に述べることはしないであろう。しかしこの観念、あるいは、この前提はこの論文の全編を通じての基音であり基本観念である。この第四の観念というのは、「時間」に関して一義的な必然論、あるいは、決定論というものをわたくしは拒否し、「時間」というものは、より本来的には、未来に関してばかりでなく過去に関しても新たな意味、(meaning, Bedeutung) をわれわれの前に開示してくれるものである、という思想である。

わたくしはより日常的なより具体的な「今—現在」というものを考えてみなければならない。より日常的な「今」の経験においては、ピアノの単純な一小節を聴く経験よりも、たとえば、複雑な混声合唱やオーケストラを聴く経験のほうがずっと日常的で普通であろう。このような複合的な「今」の経験においては、ピアノのキイの夫々は夫々の範疇に当たっている。そうして、この範疇は夫々が一個のピアノであり一定数のキイをもっている。したがって現実の

日常的な時間―「今」の拡りの様相は現実のピアノよりもはるかに複雑な機構を持っている。わたくしは、ここで、神についての（神が存在するものとして）次の二命題を主張したい。第一に「神の業は単純で美しい。」世界に意味をくりひろげるところの神のオーケストラの機構がたとえどのように複雑なものであってもその論理はピアノの論理と同じく単純なものである。第二に「神の業は限りなく複雑で陰影に富む。」しかしながら、神によって弾かれるピアノの旋律と音色は無限に複雑で多様な意味（sense, Sinn）に富む。だが、その論理は矢張りピアノの論理なのである。

わたくしは次に論理的空間（spatium logicale）に拡りをもった「今―現在」というものを考えてみることにする。すなわち、空間にも時間にも拡りをもった「現在」の論理機構を分析しようと思う。わたくしは、ソシュールとワイトゲンシュタインという現代最大の二人の思想家が不思議にも期せずして用いた将棋盤の論理を、ここで、借用することにしたい。将棋盤の拡りは論理的空間である。駒（複数）は範疇（複数）である。此処に、一つの局面がある。将棋の局面というものはわたくしのかんがえによれば、論理的空間に拡りをもった一つの「現在」の論理機構をもっとも良く形象化しているように思われる。盤面に並んだ駒は夫々意味（meaning, Bedeutung）を表出している。この一つの駒の意味（meaning, Bedeutung）を規定しているものはその駒と他の凡ての駒との関係、むしろ、端的には、局面の意味（sense, Sinn）、局面の絵模様を構成している駒の配列、絵模様のフォームに外ならない。盤面の駒は夫々意味（meaning, Bedeutung）を表出していると同時に夫々が固有な意義（value, valeur）を担っている。

むしろ、駒はそれだけ一つを取ってみるならば、それは（特性をもった）意義そのものである。と言えるであろう。この意義についてのソシユールの定義は極めて巧みである。すなわち、『意義とは……その内容によって肯定的に定義されるのではなく、体系の他の項 (Les autres termes du système) との関係によって否定的に (négativement) 定義される。意義の最も正確な特徴は他の項 (Les autres) がそれでないところのものである、ということである。』われわれはソシユールのこの暗示的な定義をそのまま用いる事が出来るであろう。なぜなら、われわれは、さきに、意義を否定命題の末である、としたのであるから——。駒（意義）は盤面の一定位置に置かれ他の駒（意義）との関係によって一定の意味 (meaning, Bedeutung) を表出している。しかし、この駒はいま表出している意味の他に、まだそれ以上に、殆んど無限な陰影に富む意味（複数）を表出しうる可能性を内含している。しかし、この弾力的な可能性はだからといって決して無規定的であるのではない。それは将棋のルールの論理によって規制されており、将棋の盤面という論理的空間の外において機能（意味作用）することは出来ない。これが、ソシユールの用語法を採用するならば、「現在」の共時態的 (synchronique) 論理構造である。将棋の局面の意味 (sense, Sinn)、その絵模様（フォーム）というものは一定の期間 (Period) 持続して恒常を保つ。しかし、或る駒が動くことによつて、一定位置から（決定的な意味をもつ）他の位置にそれが将棋のルールに従つて移ることによつて（多くの駒が動く必要はない、たった一つの駒が決定的意味をもつて動くだけで充分である）絵模様のフォームは一変する。フォームは他のフォームに飛躍して変る。局面の意味 (sense, Sinn) は転換し、飛躍し、全然別の局面の意味に変る。わたくしは友人あるいは恋人と話しをしていた室から戸を開けて冬枯の街路樹の歩道に足を踏み出す、わたくしは先行の「現在」

からいまの孤独な「現在」へ、一変して、足を踏み入れる。逆に、冬枯の歩道から恋人の待つ室に足を踏み入れる。わたくしにとって、さきの孤独な「現在」からいまの幸福な「現在」へと、一変して、局面は変る。将棋の局面において、或る一群の駒があるいは、或る一つの駒が決定的な主題的な重要性をもつことがある。その時、その駒の位置は局面のシンボルになる。たとえば、わたくしは「今—現在」室でショパンの曲を聴いている。この曲の旋律がわたくしの所在する「現在」の主題である。しかし、わたくしの手のペンは紙の上に悪戯の絵を書いている。窓のそこには金雀枝の茂みがかすかに風に揺れている。ストーブが炎を上げて燃えている。まだ、この「現在」の論理的空間の局面にはわたくしによって無視された数多くの範疇がある。しかし、次の局面においては、わたくしによって無視され知られなかった範疇が決定的な（シンボリック）役割を担うかもわからない。しかも、それは、「現在」の将棋盤のルール（論理）に従ってである。わたくしは、西洋の将棋チェスよりも、東洋の将棋の方がもっと良く「現在」の論理機構を形象化するのに役立つのではないかとかんがえる。われわれ東洋の将棋においては持駒というものがあり盤面の外部から盤面の内部にその駒が打ち込まれる。そうして、その行為は出来事によって、全く局面を一変させることが出来る。しかも、それは将棋の論理に従ってである。ただ、「時間」の将棋においては神のみが持駒の数を正確に知っており、局面の範疇を残るくまなく知っている。たとえどの様に単純な局面であっても、われわれ人間には一体誰れが、いづれかの範疇を見落していないと確言できるであろうか？戸を開けて外に出たとき、S・F小説が現実化したように、わたくしは、宇宙人に出会わずかもわからない。しかしそれにも拘らず、「時間」の論理に従うならば、十年前に死んだ恋敵に出会うなどということは決してないであろう。

わたくしはすでに、ソシュールの言う、「時間」の、通時態 (diachronie) について語っている。わたくしの此処での記述がソシュールの理論の正しい解釈であるかどうかは知らない。わたくしはその事を顧慮しないであろう。最後に、わたくしは、本来的な「未来」と「過去」について語らなければならない。この点にかんし、わたくしの議論は、ミード (George H. Mead) の論文に多くを負っている。⁽¹²⁾ しかし、ミードの記述の不明明さは、わたくしの考えによると、共時態と通時態の区別を明らかにしえなかったことに由来している、とおもう。ミードの分析の大部分は専ら通時態にかかわっているのである。「現在」の論理的盤面上の範疇は、それがいま表出している意味 (meaning, Bedeutung) の外に、殆んど無限な意味、実現可能性を内含している。しかし、この範疇は論理的盤面の上を勝手に位置を変えるわけにはゆかない。「時間」の将棋の論理によって、その移動の可能性は制約されている。幾つかの移動可能性のなかから、もっともあり得る、可能性をわれわれが予見するのは、この範疇とこの「現在」の論理的盤面上に配列する他の凡ての範疇との関係、端的には、この「現在」の局面が示す絵柄のフォームによってである。われわれが予見する未来は、この「現在」(共時態)の論理的盤面上からどの範疇を選び、更にそれに加えるに、われわれが「現在」の局面のフォームにいかなる洞見を持つかによって決定されるのである、とわたくしは主張したい。この論理的盤面上に並ぶ範疇は物理的範疇ばかりでなく、心理学的範疇、経済学的範疇、法的範疇、等々があるのである。わたくしは、したがって、一義的な物理的因果律の決定論を拒否するであろう。わたくしのこの帰結はたしかにもっと展開しなくてはならないのであるが、しかし、それは此処での仕事ではない。さて、範疇(駒)が予見した通りに動き、予見した未来が「現在」として出現 (emergent) したとする。この「現在」はさきの過去となった「現在」を

matrix としそこから動的に出現する。たとえこの出現 (emergence) が予見通りであったとしても、この出現は非連続であり、偶然 (accident) であり、ひとつの飛躍である。出現した新しい「現在」の局面は必ず予見不可能であった何か新しいものを含んでいる。局面から局面への飛躍において動いた範疇 (駒) はすなわち出来事 (event, événement) なのである。所で、只一つの範疇 (駒) が動き他の凡ての範疇 (駒) は論理的盤面上にそのまま同一位置に動かずに止っていたとして、一つの範疇 (駒) の飛躍は他の凡ての範疇に反響し他の凡ての範疇 (駒) の意味 (meaning, Bedeutung) を変える。なぜなら、局面の意味 (sense, Sinn) が新しくなり、局面の絵柄のフォームに予見不可能であった何ものが加わったからである。この様にして出現した新しい「現在」の新しい意味 (sense, Sinn)、新しいフォームを知った上で、われわれは、タイム・マシンに乗って先行の過去の「現在」に戻るなどと言うことは出来ない。それは文章構成法の論理に叛く違反行為であろう。それは恰も丁度後続のセンテンスから書きはじめて、さきにくるべき先行のセンテンスに逆行する様なるものである。それは完全に文章構成法上のナンセンスにおち入ることになるであろう。これが共時態と通時態との区別からくるところの論理的帰結というものである。

最後にわたくしはひとつの形而上学的寓話をかたりたい。それは、或る意味で、ひとつのナンセンスをかたることになる。しかし、われわれが何事かを示したいとのぞむとき、われわれは屢々、暗示的に深い意味をこめてナンセンスを語るであろう。十字軍に従軍した北欧の騎士が、故郷への帰途、死神に出遭う。北欧の騎士は死神に勝負を挑む。死神

と将棋の勝負を争い、若し、騎士が勝利を収めれば、ノルウェーの自分の城に戻り其処で留守を守っている妻子と幸福な余生を送ることが出来る。若し、敗れば……。この様にして旅の途上夜毎に死神との勝負が続けられる。騎士と従者が旅をしてゆく地方の国々にペストが流行り騎士はさまざまな死の相^{すがた}を目撃する。死神と夜毎に指しつがれる盤上の勝負は決着がつかない。騎士はノルウェーの自分の城を目の前にして人^{ひと}気のない小さな礼拝堂にはいり、一人の修道士を相手に、告解をする。そのなかで、騎士は、自分が死神と争う将棋の勝負に必勝の手を発見した事を告げる。たちまち、笑い声が礼拝堂に響き、修道士は死神に姿をかえる。死神は畏を張り騎士をペテンにかけたのである。城を前にして争われる最後の勝負で騎士の敗北は決定的となる。その刹那、騎士は盤面を投げ出して勝負を滅茶滅茶にする。わたくしは「時間」において動かせない決定などというものを信じない。われわれはその様な決定を前にして「時間」の盤面を投げ出すことが出来るのである。騎士はその夜城の一族妻子と再会することが出来る。しかし、死神の死を刈り取る鎌は城の人々の上に大きく覆いかぶさる。翌朝はやく、城のほとりの荒地で、騎士と旅を共にしてきた旅芸人の人の良い無知な夫婦は死神に追い立てられる城の人々の奇怪な死の舞踏をみる、突然、旅芸人の妻は驚きの声を挙げる、荒地はこの奇怪な舞踏とは全く対蹠的に今や花咲く春の野にかわりその上を聖母が無垢な幼児キリストを歩ませている。われわれが「時間」のうちにみたいとのぞむ相は、一体それは、なになのであうか？

Die Aesthetik ist transscendental.

a. Y. M.

[註]

- (1) St Augustinus : Confessiones XI, xxii, 28.
(2) Vigier : Les idées de temps, de durée et d'éternité chez Descartes. (Revue philosophique, 1920.)
cf. Jean Laport : Le rationalisme de Descartes. (p.158—160.) (P.U.F. 1950.)
(3) cf. Henri Bergson : L'évolution créatrice. (p.308 ff) (P.U.F. 1962.)
(4) cf. Augustinus : Confessiones, XI.
(5) " " " , XI, xv, 18.
(6) " " " , XI, xx, 26.
(7) Sunt enim haec in anima tria quaedam et alibi ea non uideo, praesens de praeteritis memoria, praesens de praesentibus contutus, praesens de futuris expectatio.
(8) cf. Augustinus : Confessiones, XI, xxvi, 33.
Inde mihi uisum est nihil esse aliud tempus quam distentionem : sed cuius rei, nescio, et mirum, si non ipsius animi.
cf. XI, xxix, 39.
(9) cf. Ferdinand de Saussure : Cours de linguistique générale. (p.133f : p. 145f) (Paris, 1915)
(6) いま、D音のかわりに、または、D音とともに五線譜の上に所在しない音、たとえば、ロップの壊れる音が響くとする。これが瞬間としての「現在」である。この瞬間としての「現在」は構造を持つ旋律の「現在」のフォームを破る、あるいは、他所から闖入してきてこのフォームにつけ加わる。この瞬間としての「現在」の意味論的統一はいわばあたかも一点の存在のうちに凝集している。ロップの壊れる音、人の絶叫等々の意味をわたくしは感投詞の意味 (exclamatory sense) と仮に名づけたらと思う。あゝ!!!と叫ぶ声は構造を欠く、したがって、そのままではほとんど意味を欠く。「現在」である。この叫び声の意味はそれをとりまくまわりの状況の記述によって補足されて示されねばならないであろう。したがって、旋律の「現在」とそれを中断する、あるいは、それに附加される瞬間の「現在」、それらはそれを複合して意味の脈絡をつけるところのより広い背景の視野をもつ文脈を要求し、その文脈のなかに位置を占めてはじめて意味をもつてであろう。

- (10) Ferdinand de Saussure : *ibid.* (p.125 f.)
- (11) " : *ibid.* (p.162)
- (12) George Herbert Mead : *The Philosophy of the Present.* (The Open Court Publishing Company, 1959)